

国語科学習指導案

日時 令和3年5月25日(火) 第6校時(14:45～15:35)

年組 中学校第2学年1組

場所

教材 「扇の的」(光村図書『国語2』, 正進社『新・国語の便覧』)

単元 ドラマ「扇の的」をつくろう

単元について

研究テーマは、「学びを豊かにする」「教科等本来の魅力」である。国語科では昨年度より「根っこを育てる教育」として「物語の読み」の授業を見直し、「てだて」や「しつらえ」のあり方を具体的に考え、学びを豊かにすることを研究テーマとしている。「根っこ」とは「意識と無意識をつなぐもの」であり、他者との関わりによってより大きく太くなるものと、国語科では考えている。本授業は、この「根っこ」を育てることを目的に、中学校2年「扇の的」(平家物語)を生徒自身が自己の内面と出会う文学の読みの授業として実践する。

本教材の「扇の的」は、那須与一が老兵を射殺した後の味方の兵の反応が分かれている点に、同時代の武士同士であってもものの見方考え方が異なるを感じさせる教材である。また、弓の名手である与一は、揺れる舟上にある扇の的を射る命令を一度は断ったものの、それに的中した後の老兵を射る命令には即座に答えている。この時の与一の心情には扇落しの際にはためらいが大きく、命令を辞退する発言や武士としての誇りを守るために神仏に祈念する様子などがあり、大きな揺れを感じる。しかし、扇へ矢が的中した後の人を殺める際にはためらいがないという武士独特のものの見方考え方が見える。「あな無慈悲、心なき源氏の奴輩」と平家物語に語られるほど、情趣を介する平家と奇襲をしても勝ちたい源氏の、同じ武士と言っても一括りにできない価値観の違いが感じられる。自己の根っこを自覚できる文学教材選定の観点としては、物語の中に「空白」を含む作品や、立場や人物により違う角度で物事を見ることのできる作品、人間の多面性に気付くことのできる作品が相応しくのではないかと考える。「扇の的」は、自己のものの見方・考え方を広げると共に、意識と無意識をつなぐ「根っこ」にふれることに適した作品であると言えるだろう。

生徒たちは、学校、家庭、友だちなどに合わせて生きており、自己の内側から湧き上がる感情や心の動き、思い描いたことといったものをありのままに発露させることにためらいを感じている様子が多く見られる。現実生活で自己の考えを表出することをためらう生徒でも、古典という時空を超えた物語世界なら、教師に求められる答えや周囲に合わせた意見ではない自分らしさを表現し易い可能性がある。そうした学びの中で、作品との対話、自分との対話、他者との対話を大切に、生徒自身が自己の内面と出会い、ものの見方・考え方がひらかれると考える。また、言葉との向き合い方として、分からない言葉や概念をその場ですぐ調べる習慣や方法が身に着いていない生徒も多い。生徒の古典学習歴は、小学校は「祇園精舎」など音読を楽しむ教材に触れ、中1ではかぐや姫でなじみのある『竹取物語』では分かり易い現代語から行動・心情・人物像等を把握している。社会科(歴史)の教科書では源平合戦については1ページのみ充てられている。屋島の戦いについては資料集に「◎1185年2月 屋島の戦い(香川県)義経の奇襲で源氏が勝つ。那須与一の『扇の的』はこのとき」という説明と絵が日本地図に

あるのみである。もちろん、「くつばみ」「えびら」「中差」「かぶら」等の馬具や武具は資料集にも紹介されていない。

中学校古典教育において、上記のような関連する他教科の既習事項を確認し、生徒達は何を知っていて何を知らないかを把握することが必要ではないかと考える。社会科でも「平家物語」や「源平合戦」を扱っていても、政治史・経済史・外交史・文化史の学びであり、その時代を生きた人間の生活をありありと伝えることは国語の時間で行う、第0次の学びが必要だろう。指導にあたっては、まず日常語彙ではない分からない言葉をそのままにしない姿勢を養うと共に、物語の空白に気付いて補う論理的思考力を高めたい。また、口語訳を読んでも分からないと言われてしまう古典を、少しでも楽しく知識や言葉を補って読めるようにしたい。そのでたてとして、人物紹介文、小道具リスト、ト書きを書くことを中心とした脚本制作という学習項目を設定した。琵琶法師による語りの文学である『平家物語』は演劇的要素が強い作品だと感じている。脚本を作ることが目的ではなく、物語世界へ訳文でアクセスするための手立て、古文を深く読むための手立てとして脚本製作という方法を選択した。訳文を先に読み古文を踏まえて脚本を制作する活動を通して古典に親しみ、共に作品世界を楽しみたい。

指導目標

1. 作品の時代的背景や概要を把握し、馬具や武具の名称やセリフの言葉遣いなど日常語彙ではない言葉や重要古語を理解させる。〈知識・技能〉
2. 命令を受けた後の与一の言動や老兵を射た後の源氏方の兵の対照的な反応に着目して武士特有のものの考え方見方を読み取り、自己のものの見方考え方との違いを感じ取り表現させる。〈思考・表現・判断〉
3. 不明な点は質問・確認して他者と協働して理解を深め、脚本制作を通して古典に親しみ楽しむ学習を展開する。〈主体的に学習に取り組む態度〉

指導計画 全8時間

第1時 「源平合戦」に関する動画を視聴する。単元の目標と学習の流れを確認する。第一幕の範読と言葉の説明をし、内容を理解する。

本文をグループで音読する。第一幕の人物とその特徴を把握し、人物紹介文を書き全体で確認する。

第2時 人物関係を意識しながら本文をペアで音読する。小道具リストを作成し全体で確認する。

脚本の書き方(セリフの上に役名を書くこと、文脈を考えて空白のセリフを補って書くこと、ト書きについて)を説明し、個人で脚本を制作する。机間巡視の際は、古語が多いセリフの理解を支えることとセリフの空白に着目させるように声かけをする。

第3時 前時に作成した良い作品を共有して、脚本の書き方のポイントと第一幕の評価基準を明示する。

- | |
|--|
| A 必要な道具や役者の動きが分かるようにト書きを書いている。 |
| B セリフの上に役名を正しく書いている。文脈に即してセリフを補い会話が成立している。 |
| C Bに達成していない場合。 |
- 個人で脚本を加筆・推敲する。読み合わせの説明をし、4人グループで読み合わせをする。

読み合わせをした際の他者の意見や交流を受けて脚本を推敲する。

第4時 第一幕の脚本の自己評価をする。第二幕の訳文の範読と言葉の説明をし、内容を理解する。第二幕の訳文をペアで音読する。人物紹介文と小道具リストを書き、全体で確認する。

第5時 第二幕の原文の前半を範読した後、ペアで音読をしてリズムを楽しむ。訳文で把握した内容を再確認しながら部分訳をする。対句や擬音語などの原文の表現に着目させ、風の吹き方や扇の描写から情景をイメージし、対句で表現された対照的な両軍の様子を読み取る。古語や文法(過去の助動詞「けり」、係り結びの法則)説明が中心にならないように留意する。

第6時 第二幕の原文の後半を範読した後、ペアで音読してリズムを楽しむ。訳文で把握した内容を再確認しながら部分訳をする。白波に浮かぶ扇の色彩豊かな絵画的表現や、与一が扇落としの際のためらいと老兵に弓を引く際の素早さの違いから与一の考えを想像する。原文と訳文を交互のペアで音読し、古語と現代語の表現の違いに気付くと共に古語を理解する。

第7時 脚本の書き方を再確認し、評価基準を明示する。

- A 「扇的」の特徴的な表現(対句・擬音語・波上の扇の絵画的表現など)を、ト書きに六つ以上明示している。
- B 必要な道具や役者の動きが分かるようにト書きを書いている。
- C セリフの上に役名を正しく書いている。文脈に即してセリフを補い会話が成立している。

擬音語や対句等の原文の表現の工夫に着目して、第二幕の脚本を制作する。脚本の読み合わせと推敲をする。読み合わせを全体で発表する。 【本時】

第8時 情景や登場人物の心情を意識して、グループで配役を決めて原文を音読する。もしも作文「タイムワープして屋島の戦いに源氏方の兵として参加していたら、どちらの発言をするか」を書き、武士のもの見方考え方と自己のそれとの違いに気付く文章で表現する。

本時の目標

1. 「くつわ」「かぶら矢」「中差」など日常語彙にはない言葉が何を指し示すのかを理解した上で、物語の展開にどのように関わるかを理解できる。また、対句を使った強調表現から、情景を想像することができる。〈知識・技能〉 見取りの方法…脚本から
2. 義経が老兵を射る命令を伊勢三郎義盛に伝える場面の叙述が本文にはないが、その空白を補って表現することができる。〈思考・表現・判断〉 見取りの方法…脚本から
3. 不明な点は質問・確認して他者と協働して理解を深め、脚本制作を通して古典に親しみ楽しむことができる。〈主体的に学習に取り組む態度〉見取りの方法…学習活動の様子から

学習の展開 観点別指導目標 (学習評価の観点) 学習活動と 内容	指導上の留意点(◆評価)
1. 導入(10分) <input type="checkbox"/> 本時の目標と流れ, 脚本の書き方と評価基準を確認する。 <input type="checkbox"/> 古文と訳文を交互にペアで音読する。	<input type="checkbox"/> 本時の目標と流れ, 脚本の書き方と評価基準を明示する。 <input type="checkbox"/> 歴史的仮名遣いや漢字の読みに注意して音読する。

<p>2. 展開1(25分)</p> <p><input type="checkbox"/>脚本を個人で書く。</p> <p>3. 展開2(15分)</p> <p><input type="checkbox"/>グループで配役を決め、脚本の読み合わせをする。</p> <p><input type="checkbox"/>個人で脚本の推敲をする。</p> <p>4. まとめ(5分)</p> <p><input type="checkbox"/>次時の学習内容を確認する。</p>	<p>○困っている点がないか注意して机間巡視で個別に指導を行う。</p> <p>○読み合わせの際には身振り手振りを交えて読むように促す。</p> <p>○机間巡視の際、手が止まっている生徒には推敲のアドバイスをする。</p> <p>◆武具の名前など日常語彙にはない言葉を理解して脚本のト書きで表現できているか。対句を使った強調表現から、情景を想像しト書きで表現できているか。〈知識・技能〉</p> <p>◆本文では空白になっている、義経が老兵を射る命令を伊勢三郎義盛に伝える場面のセリフやト書きを補って表現することができているか。〈思考・表現・判断〉</p> <p>◆不明な点は質問・確認して他者と協働して理解を深め、脚本制作を通して古典に親しみ楽しむことができる。〈主体的に学習に取り組む態度〉</p> <p>○次時の発表の予告をする。</p>
--	--

実践の成果と課題

語科では、小中9か年の学びを、第Ⅰ期前半（小学校1・2年生）、第Ⅰ期後半（小学校3・4年生）、第Ⅱ期（小学校5・6年生・中学校1年生）、第Ⅲ期（中学校2・3年生）と捉えている。第Ⅲ期（中学校2・3年）の目標は、

- 複数の登場人物における言動の解釈を踏まえ、物語の空白を補って自己表現するとと

もに、それらを交流し合うことで自分の考えを広げ人間の在り方について自分の意見をもつことができる。

である。

知識及び技能：言葉には、相手の行動を促す働きがあることに気付く。

思考力，判断力，表現力等：複数の登場人物における言動の意味について考えて、内容を解釈したことを踏まえ、物語の空白を補って自己表現する。自己表現したものを交流し合うことで、自分の知識や経験と結び付け、自分の考えを広げたり深めたりして、人間，社会，自然などについて、自分の意見をもつ。

学びに向かう力，人間性等：言葉がもつ価値を認識するとともに、思いや考えを話すだけでなく書いて伝え合おうとする態度を養う。

としている。

Ⅲ期（中学校2年生）での本実践の1番の成果は、古典に対する苦手意識が減った点である。10月に実施したアンケートの結果を図1に挙げる。

	当てはまる	どちらかという 当てはまる	どちらかという 当てはまらない	当てはまらない
1年生の時	13	31.9	37.7	17.4
「扇の的」の後	15.9	39.1	30.4	14.5
「春はあけぼの」の後	21.7	44.9	26.1	7.2

図「古典は好きか」アンケート結果(%)

このアンケートの自由記述には、脚本の読み合わせでは、登場人物になりきって動作をすることで、より状況や登場人物の気持ちが分かったという意見が多くあった。また、10月に学んだ漢詩の振り返りシートに、「漢詩は面白いと分かった。漢詩の中にも色彩表現があったり、対句があったりして平家物語みたいで面白かった。」というコメントがあった。5月に学んだ平家物語と半年近く後に学んだ漢詩が繋がったこと、生徒自らが共通点を見つけたことから、古典の表現について深い学びが生まれたことを感じた。

身体性を伴った学びによって苦手意識を持つ生徒も能動的に学ばざるを得ない場をつくり、他者と関わることでより深い学びが実現できると考える。今後の課題としては、脚本のポートフォリオ評価、読み合わせのパフォーマンス評価をより簡単にできる評価基準の設定がある。量的評価基準は観点を明示することができたが、質的評価基準は生徒が相互評価をする時には「自分と比べて」という意識になり易いため、今後の改善が必要である。この質的評価基準がより明らかになれば、他の教員がより実践し易くなる教授方法だと考える。

【 引用・参考文献 】

文部科学省, 学習指導要領解説 国語編, 2008 年

難波博孝, 「根っこを育てる国語教育 —第三項理論と児言態理論—」全国大学国語教育学会茨城大会発表資料, 2019 年

難波博孝「根っこを育てる教育—ことばなどに関わらせて—」初等教育カリキュラム学会発表資料, 2020 年

「児童の言語生態研究趣意」

坂上康俊, 戸波江二, 矢ヶ崎典隆ほか『新編 新しい社会 歴史』東京書籍株式会社, 2018年

浜島書店編集部『学び考える歴史』株式会社浜島書店, 2013 年

山元隆春, 『読者反応を核とした「読解力」育成の足場づくり』, 2014年